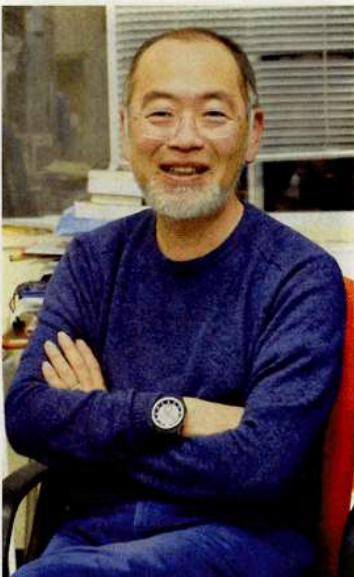


デーリー東北

八工大の星野教授「雪腐病菌」研究し30年

あるマイナーな菌類に、異常な愛情を注ぐ教授が八戸工業大にいる。カビやキノコなどの菌類を専門とする工学部生命環境科学科の星野保教授は、雪の下で活動する「雪腐病菌（ゆきぐされびょうきん）」を約30年にわたって研究。海外調査の体験をつづった『菌世界紀行 誰も知らないきのこを追って』（岩波書店、2015年）は、優れた紀行に送られる日本旅行作家協会の第1回斎藤茂太賞を受賞した。研究の傍ら、一般書を通じて菌類の魅力を発信し続ける星野教授は「どんな菌も生き方は奥深く、一冊の本になる。菌類に興味を持つきっかけになれば」と話す。（玉川那津美）

(玉川那津美)



ユーモアある作風で菌の魅力を発信する星野保教授一八豆工業大

略歴 ほしの・たもつ 東京都生まれ。名古屋大大学院農学研究科博士課程退学。博士（農学）。産業技術総合研究所を経て、2019年4月から現職。56歳。

雪腐病菌は積雪下や寒冷地で繁殖し、植物や小麦を枯らすのが特徴で、農家やゴルフ場経営者らにとつては大敵。星野教授は勤務していた北海道工業技術研究所（現産業技術総合研究所）北海南センターワークで、低温を好む微生物を活用した産業利用の技術開発を命じられたのをきづかけに、この菌と出合った。星野教授は、雪腐病菌の魅力を「研究している人が少ないから」と笑うが、カビやキノコなどの菌類は、遺伝子の構造が私たち動物と一番近く、身近に感じられるのも理由の一つだ。

研究のためシベリア合宿所で、低温を好む微生物を駆け回つた話や、寝台列車で同席した乗客からウオッカでの歓迎を受け、翌朝は通路で起きた話など、ユーモアあふれる作風で『菌道中』をつづった。まさかの斎藤茂太賞受賞を受けたが、読者からは「酔っぱらつてばかりで学術的な記述が少ない」『菌の部分を飛ばしても面白い』

「菌の生き方は奥深い」

魅力発信、紀行で斎藤茂太賞も



星野保教授の著書、菌類3部作

なぞ、お褒めの言葉を頂いた」と言う。

2作目「菌は語るミクロの開拓者たちの生きざまと知性」(春秋社、1919年)では、1作目の汚名を晴らそと、ユーモアを残しつつ、雪腐病菌を詳く解説。すると今度は、「脚注が長く、飲んだくれてないのでつまらないとの苦言を受けた」と苦笑する。

菌類3部作と位置付けた最終作「すごいじ進めたい」と意欲を燃やしている。

菌類(筑摩書房、20年)では、雪腐病菌のみならず、菌類全般の生活環や多様な生き方にについて紹介している。

すっかり菌の魅力の伝道師となった星野教授。本気か冗談か、「今ガマノホタケを主人公にしたライトノベルを書いてみたい」と語る。もちろん本業でも、雪腐病菌を用いた青森県内の産業振興や、県内の菌についても研究をやっている。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。